論　文

青年期女子における「恋愛関係志向性尺度」の作成

田　中　莉　紗

要旨

本研究では、現代の多様化したさまざまな恋愛の形について包括的に概観するために、これまでの恋愛研究に共通してみられた特徴を、2軸の特性によって理解することを試みた。その2つの特性は、①不特定性 - 特定性、②非自己保存性 - 自己保存性である。第一の軸である「不特定性 - 特定性」の特性とは、「恋愛関係」における「恋愛行動」への志向性を示し、第二の軸である「非自己保存性 - 自己保存性」の特性とは、「恋愛関係」への態度の志向性を示すものである。この際、本研究における「恋愛行動」は、恋愛関係を求める行動のこと、「恋愛関係」は、「性愛感情を含む親密な二者関係」のことを示す。そして、本研究では、この2軸の特性を統合した視点を「恋愛関係志向性」と命名し、①不特定 - 非自己保存型、②不特定 - 自己保存型、③特定 - 非自己保存型、④特定 - 自己保存型の4種のタイプによって構成される「恋愛関係志向性の2次元評価4分類モデル」の実現可能性を検証することを目的とした。そのために、「恋愛関係志向性尺度」を作成し、評価することとした。女子大学生274名を対象に、不特定性尺度7項目と、非自己保存性尺度9項目からなる「恋愛関係志向性尺度」について回答を求めた。非階層クラスタ分析の結果、「不特定性 - 特定性」、「非自己保存性 - 自己保存性」からなる、「恋愛関係志向性の2次元評価4分類モデル」により、多様化した恋愛のあり方を概観する際の指標として用いられ得る可能性が示唆されたと考えられる。

キーワード：恋愛関係、青年期女子、志向性

Ⅰ　問題と目的

1）はじめに

ひとことに“恋愛”といっても、心理学的視点だけでなく、生物学的視点や、人類学的視点・文化的視点等、多面的に言及されてきている経過がある（Robert & Karin, 2006）。昨今でも、恋と愛の区別（竹田、2010；髙坂、2011）をはじめ、そもそもの性愛性という概念が持つ曖昧さといった特徴からか、研究も多岐にわたる。加えて、愛というものは比較的まれにしかみられず、さまざまな形の偽りの愛によって取って代わられる（Fromm, 1956／鈴木訳 1991）ように、それらを包括的に捉えるといった試みは非常に困難なものであると考えられる。なかでも、ロマンティックラブの浸透や解体などの時代経過に伴う文化的背景の影響を、女性はより大きく受けてきていることは否定できない事実である。よって、本研究においては、まずは女性の恋愛のあり方について注目することとした。加えて、従来の「モノガミー（一夫一婦制度）」とは相反する、制度にとらわれるのでなく自らの意志によって愛の選択を行う「ポリア

モリー（Polyamory）」という新たな性愛スタイルが、アメリカを中心に日本においても浸透してきている（深海、2015）。つまり、セクシュアリティの問題を含め、これまで前提とされてきた、従来の制度や、日本固有の文化、生殖とは切り離された恋愛の志向性が定着してきているということとなる。よって、ますます“恋愛”といった概念の全体像は、複雑化していることは否定できない。しかし、恋愛の様相自体が多様化している現代においてこそ、これまでなされてきたように、性愛や恋愛の区別をすることや、他の概念との関連を捉えることだけでなく、そこから派生したさまざまな恋愛の形について包括的に研究することには意義があると考える。よって、まず前提として、本研究における「恋愛関係」は、「性愛感情を含む親密な二者関係」のこと、「恋愛行動」は、恋愛関係を求める行動と定義する。その際、恋愛関係の対象は、異性に限定しないものとする。

2) 対人発達的視点からみた青年期の「恋愛関係」

青年期に限定しても、青年期の愛着行動としての観点（Hazan & Shaver, 1987, 金政・大坊、2002／2003）、自己愛との関連（小塩、2000）等、さまざまな概念との関連性をみる研究がなされてきている。その際、恋愛や、異性を主とした対象との関係自体が、青年期の個人にとって重要なテーマのひとつであるという点では共通している。従来の研究を遡ると、Erikson（1959／西平・中島訳 2011）は、適切なアイデンティティの感覚が確立されて始めて、異性との本当の親密さが可能となるとしている。そして、他人との間に本物かつ相乗的な心理的親密さを発達させる能力がなくても性的な親密さは成立するため、青年期後期あるいは成人期初期に、他者（自分自身の内的な資源）と親密な関係を築くことができないと、自分自身を孤立させステレオタイプ化された形式的な対人関係を見出すことしかできないか、あるいは同様の試みを繰り返すしかできないと指摘している。大野（1993）はこの Erikson の理論を前提とし、真の親密性まで成熟していない状態での自己のアイデンティティを他者の評価によって補強しようとする恋愛的行動を「アイデンティティのための恋愛」と呼び、こうした心理力動性が現代青年の中に蓋然性として存在することを指摘している。また、Sullivan の概念における青春期前期では、身体的な性の成熟の始まりから自らの性器的性感情を表出するための安定した「対人的性的パターン」が確立されるときまで、そのパターンの変容は続くことも示唆されている（Chapman & Chapman, 1980／武野・皆藤訳 1994）。つまり、アイデンティティの確立に関わらず、「対人的性的パターン」は既に存在し、それらは変容していくものであると理解できる。かつては、アイデンティティの確立以前に、恋愛関係において「本物の」心理的な親密さを築くことは困難（Erikson, 1959／西平・中島訳 2011）とされてきたが、林（2010）が指摘しているように、現代では、Erikson や Sullivan の対人発達的な前提とは異なる恋愛関係の確立のあり方が表面的にはみられるようになってきている。結果として、「アイデンティティのための恋愛（大野、1993）」といったように、「さまざまな形の偽りの愛（Fromm, 1956／鈴木訳 1991）」の形が存在すると考えられる。

3)「不特定性 - 特定性」・「非自己保存性 - 自己保存性」の 2 軸による解釈

本研究では、多様化した恋愛の形について包括的に言及するため、まずはこれまでの恋愛研究に共通してみられた特徴を、2 軸の特性によって理解することを試みた。第一の特性は、「不特定性 - 特定性」の軸である。そもそも恋

愛関係は、時代に関わらず、その他の愛（兄弟愛、母性愛、自己愛、神への愛）とは異なる性質を持つものであり、対象と本質的に関わりあうことの前提として、(配偶者や恋人専用の)「排他性」「拘束感」という特徴が挙げられている（Rubin, 1970; Davis, 1985; Fromm, 1956／鈴木訳 1991; 髙坂、2009／2010／2011）。この特徴は昨今においても、恋愛関係という親密な二者間を維持・継続していくためには、第三者の介入を拒むような排他性（exclusivity）が必要（金政、2006）であると、指摘されている。一方で、現代社会の多様化により、対象と本質的に関わるといった前提に関わらず、そこから派生したであろう多様な恋愛の形が展開されている事実もあると考えられる。新矢（2003）が、現代の恋愛のあり方が、永続性の保障がされず不安定性を帯びたものになっていると指摘しているように、「排他性」つまり、「特定性」の保障されない「不特定性」を帯びた現代社会の恋愛のあり方が存在することもまた事実のようである。実際に、牧野（2012）は、大学生の恋愛と性行動について言及しており、特定の異性との恋愛関係があるにも関わらず、他の異性への好意や性的関係を持つことが稀ではないことを示している。つまり、これまでは、「排他性」や「拘束性」といった特徴が、恋愛関係を捉える上での全般的な指標として前提に置かれてきた。しかし、第一の特性では、個人の恋愛関係が、いかに特定の対象あるいは不特定の対象との間で「恋愛行動」が生じるのかといった視点に依拠することとし、この特性を、「不特定性 - 特定性」と命名することとした。

第二の特性は、「非自己保存性 - 自己保存性」の軸である。この特性は、恋愛に関する種々の類型論において、恋愛関係に対する態度として、多く言及されていると考えられる。Fromm, 1956／鈴木訳 1991）は、「共棲的結合」と「成熟した愛」を対照的にとらえ、「成熟した愛」は自分の全体性と個性を保ったままの結合であると説明した。このように、恋愛の様相において、いかに恋愛関係のなかで自分の「全体性」を失わずに、ライフスタイルや価値観を維持するか否かといった視点は、これまで多層的になされてきた研究において、多く言及されている特性であると考えられる。もちろん、恋愛に関する類型論的な研究については、比較的幅広く展開されており（Lee, 1973; Sternbarg, 1986; Rubin, 1970）、日本でも Lee（1977）の色彩理論を基にしたもの（松井ら、1990）を筆頭に多くの研究が存在する。代表的なものを展望すると、ロマンティシズム尺度（Gross, 1944）の提唱において、ロマンティックな態度と現実的な態度を区別したことから始まる。この態度の区別に関しても、恋愛関係において、自分の価値観やライフスタイルがいかに影響を受けるかといった特性を吟味したものであると考えられる。Rubin（1970）を基に、藤原ら（1983）が作成した「日本語版 love-liking 尺度」においては、love（親和・依存欲求、援助傾向、排他的感情）と liking（好意的評価、尊敬と信頼、類似性）を区別して捉えた。love の要素として、「排他的感情」とともに挙げられた、「援助傾向」は「相手のためなら自分の時間やものを犠牲にできる」、「親和・依存欲求は「相手と一緒にいたい、相手がいないと辛い」と定義がなされている。このように考えると、Lee（1973）の提唱した、恋愛における 6 類型の各特徴においても、相手の利益のための自己犠牲（Agape／献身的な愛）、自己防衛と交際相手への執着のなさ（Ludas／遊びの愛）、自分の目的のための手段（Pragma／実利的な愛）、一方的な没頭（Eros／耽美的な愛）、自他ともに偏りのなさ（Storge／友愛的な愛）、被愛に纏わる不安による交際相手への没頭（Mania／

狂気的な愛）といったように、恋愛関係の上で相手と自分のどちらに重きが偏って関係が成立しているのかとの特徴によって示されている。Sternberg（1986）は、親密さ（intimacy）、情熱（passion）、コミットメント／決心（decision／commitment）の 3 要素の組み合わせによって 7 タイプに恋愛が分類できることを示唆した。「親密さ」はお互いの親しみの深さを、「コミットメント」はお互いがどれくらい離れられない関係かをそれぞれ示しており、ここでも恋愛相手への親密性や関わりの程度を測っていることがうかがえる。よって、これまでの恋愛に関する類型論的な研究に共通してみられた、個人の「恋愛関係」に対する態度の志向性を、本研究では「非自己保存性 - 自己保存性」と命名することとした。

4）目的

これまでの恋愛研究は、恋愛関係に対する態度を測るものと、恋愛行動を測るものとの、二つに大別されてきた。しかし、本研究では、先述したように、第一の軸である「不特定性 - 特定性」の特性では「恋愛行動」への志向性を測り、第二の軸である「非自己保存性 - 自己保存性」の特性では、恋愛関係への個人の態度、つまり「恋愛関係」への志向性を測ることとした。そして、その双方を統合した視点を「恋愛関係志向性」と命名し、あえて二つの視点を統合して捉えることによって、現代の多様化した恋愛関係を、より包括的に概観することを目的とした。

まず、①不特定性 - 特定性の軸は、恋愛行動の対象が、特定の対象であるか、不特定の対象であるかを示す軸である。つまり、「不特定性を帯びた恋愛行動」とは、交際相手が比較的よく変わることを示す。「特定性を帯びた恋愛行動」とは、交際相手が一定であることを示す。②非自己保存性 - 自己保存性の軸は、恋愛関係において、自分のあり方をどの程度、維持するか、あるいは、相手に合わせるのかを示す軸である。つまり、「非自己保存性を帯びた恋愛関係」とは、交際する相手に合わせて、自分のライフスタイルや考え、価値観を投げ出すものを示す。「自己保存性を帯びた恋愛関係」とは、交際をしても、自分のライフスタイルや考え、価値観を変えないものを示す。本研究では、4 象限のタイプを、Figure1 に示したように、不特定性得点と非自己保存性得点が共に高い群を「不特定 - 非自己保存型」、不特定性得点が低く、非自己保存性得点が高い群を「特定 - 非自己保存型」、不特定性得点が高く、非自己保存性得点が低い群を「不特定 - 自己保存型」、不特定性得点と非自己保存性得点が共に低い群を「特定 - 自己保存型」と定義した。この 2 軸による分類は、あくまでも包括的な恋愛関係における志向性のモデルであり、恋愛経験の有無に関わらないものとする。そして、以上の、恋愛関係志向性を類型化したモデルを、「恋愛関係志向性の 2 次元評価 4 分類モデル（Figure1）」と呼ぶこととした。そして、「恋愛関係志向性の 2 次元評価 4 分類モデル」の実現可能性を検証するために、「恋愛関係志向性尺度」の作成することとした。

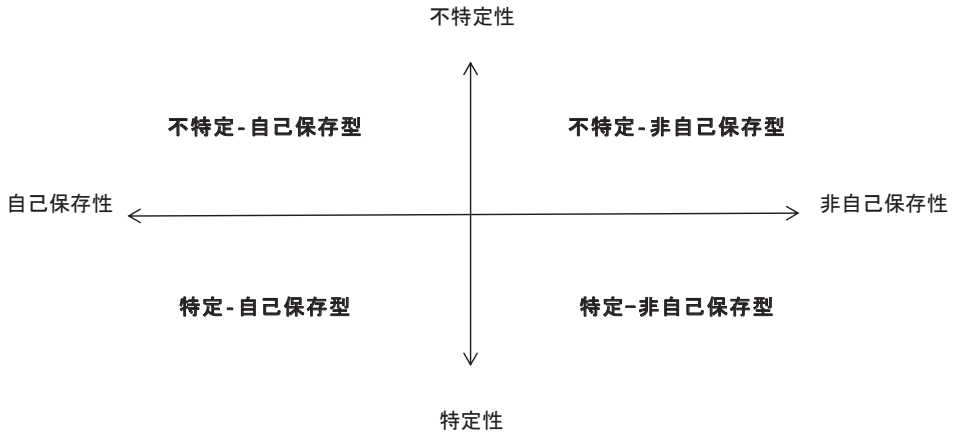

Figure1　恋愛関係志向性の２次元評価４分類モデル

Ⅱ　方法

1）調査対象

18 歳～ 25 歳の女子大学生 274 名（1 名除外、平均年齢 19.97 歳（*SD*=1.31））を対象に行った。

2）調査時期

2012 年 10 月～ 11 月

3）手続き

「恋愛関係志向性尺度」を検討するための 19 項目からなる質問紙を、大学の講義での配布、または、個人への手渡しをし、任意での回答を求める方法により実施した。

4）質問紙の内容

①本尺度は、不特定性と非自己保存性の２つの下位尺度で構成した。この２つの下位尺度は、先行研究に共通してみられたそれぞれの特徴を抽出し、筆者が作成したものである。「不特定性尺度」は、先行研究において共通してみられた「排他性」「拘束感」を表す９項目（「その時々に楽しめる恋愛をたくさんしたい」、「結婚をするまでに、色んな相手と交際してみたいと思う」など）、「非自己保存性尺度」は、これまでの恋愛に関する類型論的研究において共通してみられた特徴を表す 10 項目（「恋愛をしたら、相手に合わせることばかり考えてしまう」、「恋愛をすると、つい相手に流されてしまうことが多い」など）であり、５段階評定によって回答を求めた。得点が高ければ、恋愛関係における不特定あるいは非自己保存傾向が高いことが示され、得点が低ければ、恋愛関係における特定あるいは自己保存傾向が高いことが示される。また、本尺度は、恋愛経験の有無や対象の性別に関わらないものとした。よって、特定の人を想起して回答する形式ではなく、「あなた自身にどの程度あてはまるか」に回答する形式とした。

②「不特定性尺度」による「恋愛行動への志向性」と、「非自己保存性尺度」による「恋愛関係への志向性」の２つの視点を統合した、「恋愛関係志向性尺度」の内容の吟味と同時に、2 軸の特性への理解の深化、各恋愛関係志向性タイプの特徴を検討するために、「恋愛プロフィール」として、これまでの交際経験の有無、これまで交際した人数、最長の交際期間を尋ねた。

Ⅲ　結果

1）尺度の構成と信頼性の検討

①フロア・天井効果

不特定性項目の「6. 同時に複数の人と交際することは、悪いことではないと思う」と、非自己保存性項目の「13. 恋人ができたら、それまでの友人との関係が遠のいてもよい」に、フロア効果がみられたため、除外することとした。

②因子分析と下位尺度間の相関の検討

フロア効果がみられた 2 項目を除いた、「恋愛関係志向性尺度」の 17 項目で、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った（Table1）。その結果、因子の解釈のしやすさ、因子間相関（r=.082）をも考慮して、想定した 2 因子構造が妥当であると判断した。また、因子負荷量が.40 に満たない項目は除外した。

③信頼性の検討

採用した不特定性尺度 7 項目と、非自己保存性尺度 9 項目の Cronbach の α 係数を算出したところ、α =.75、α =.85 であった。よって、不特定性尺度、非自己保存性尺度ともに内的整合性は十分であると考えられた。不特定性得点の平均値は、20.61 点（最大値 35、最小値 7、SD=5.29、）であり、非自己保存性得点の平均値は、25.52 点（最大値 45、最小値 9、SD=6.83、）であった。

2）恋愛プロフィールと恋愛関係志向性尺度の下位尺度との関連

交際経験の有る群（N=223）の不特定性得点の平均値は、20.92 点（SD=5.57）、交際経験の無い群（N=51）の不特定性得点の平均値は、19.27 点（SD=3.59）であった。交際経験の有る群と無い群の不特定性得点に差があるかど

Table1 「恋愛関係志向性尺度」の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

因子名と項目数	1	2
F1『非自己保存性』　α =.85		
2.　恋愛をしたら、相手に合わせることばかり考えてしまう。	**.755**	.033
8.　恋愛をすると、つい相手に流されてしまうことが多い。	**.714**	.000
1.　恋愛をすると、自分よりも恋人の考えに合わせることが多い。	**.708**	.059
4.　恋人に自分を必要としてもらうために、自分の生活を犠牲にしてもよい。	**.666**	-.035
7.　恋人には言いたいことを言わず、相手に自分を合わせたいと思う。	**.611**	.027
3.　恋愛をしたら、相手の好みに合わせたいと思う。	**.543**	.000
9.　恋人の価値観に疑問を感じても、交際を続けることを優先させると思う。	**.536**	-.046
6.　自分が我慢することで恋人との関係がうまくいくならば、それでいいと思う。	**.532**	.016
5.　恋愛をしたら、自分のライフスタイルを大切にすることには、それほどこだわらないと思う。	**.480**	-.030
F2『不特定性』　α =.75		
12. その時々に楽しめる恋愛をたくさんしたい。	.054	**.780**
14. 結婚をするまでに、色んな相手と交際してみたいと思う。	-.055	**.693**
13. なるべく多くの異性から好意をもたれる機会を求める。	.136	**.568**
11. 恋人がいても、より魅力的な人との出会いを求めるのは自然なことだ。	-.044	**.545**
10. その人との将来を考えられないような異性と交際することもあると思う。	.064	**.501**
16. たくさんの異性と仲良くしたいと思う。	-.028	**.409**
15. 一度恋愛をしたら、その相手とずっと付き合いたいと思う。　＊	-.308	**.403**
因子間相関	.082	

＊は逆転項目

うかについてt検定を行った結果、有意差がみられなかった（t（272）=-.67、*n.s.*）。よって、「恋愛関係志向性尺度」の不特定性得点の高低と、実際の交際経験の有無に関連がみられるとはいえなかった。また、不特定性得点と交際人数（r=-.072、*n.s.*）、不特定性得点と交際期間（r=.061、*n.s.*）の相関はみられなかった。非自己保存性得点と交際人数（r=.016、*n.s.*）、非自己保存性得点と交際期間（r=.105、*n.s.*）の相関もみられなかった。よって、不特定性得点と非自己保存性得点の高低と、恋愛プロフィール（交際経験の有無、実際の交際人数や交際期間）に関連がみられるとはいえない結果となった。これらの結果からも、本尺度で測ったものはあくまでも恋愛関係における志向性であり、実際の恋愛経験という行動とは異なるものであることが推察された。

3）恋愛関係志向性タイプの分類

「恋愛関係志向性尺度」の下位尺度（不特定性尺度、非自己保存性尺度）得点の高低により、恋愛関係志向性タイプの分類をするため、4クラスタに指定し、非階層クラスタ分析を行った。その結果、第1クラスタは81名、第2クラスタは54名、第3クラスタは49名、第4クラスタは90名だった（Table2）。第1クラスタは不特定性得点と非自己保存性得点が共に高い群、第2クラスタは不特定性得点が低く、非自己保存性得点が高い群、第3クラスタは不特定性得点が高く、非自己保存性得点が低い群、第4クラスタは不特定性得点と非自己保存性得点が共に低い群、との結果が得られた。つまり、第1クラスタが不特定 - 非自己保存型、第2クラスタが特定 - 非自己保存型、第3クラスタが不特定 - 自己保存型、第4クラスタが特定 - 自己保存型に相当すると考えられた（Table2、Figure2）。

Table2 「恋愛関係志向性尺度」のクラスタ分類結果

	クラスタ1 不特定 - 非自己保存型	クラスタ2 特定 - 非自己保存型	クラスタ3 不特定 - 自己保存型	クラスタ4 特定 - 自己保存型
不特定性得点	.70	-.81	1.05	-.71
非自己保存性得点	.71	.92	-.87	-.72
ケース数	81	54	49	90

変数はZ得点化したもの

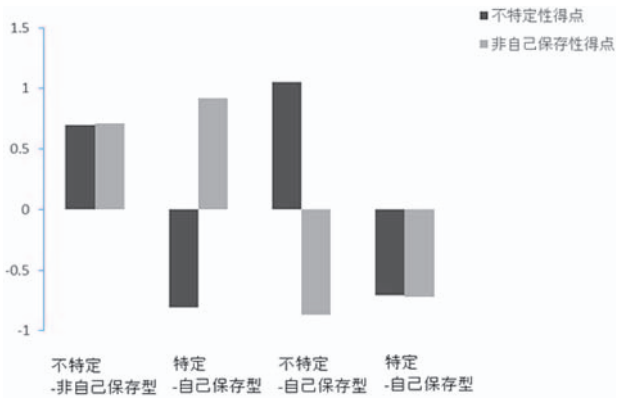

Figure2　不特定性得点・非自己保存性得点のZ得点

4）恋愛関係志向性タイプ別の恋愛プロフィール

恋愛行関係志向性タイプごとの恋愛プロフィールの比較したものが、Table3 である。交際経験の有る者の割合に関しては、特定 - 非自己保存型（88.89％）、不特定 - 自己保存型（79.59％）、不特定 - 非自己保存型（79.01％）、特定 - 自己保存型（78.89％）の順に高かった。これまでの交際人数の平均については、不特定 - 非自己保存型（2.91 人）が最も多く、次いで、不特定 - 自己保存型（2.68 人）、特定 - 非自己保存型（2.63 人）、特定 - 自己保存型（2.24 人）、と続いている。最長の交際期間に関しては、不特定 - 非自己保存型（19.23 ヶ月）が最も長く、次いで、特定 - 自己保存型（18.16 ヶ月）、特定 - 非自己保存型（16.07 ヶ月）、不特定 - 自己保存型（15.49 ヶ月）との結果が得られた。

Table3　恋愛行関係志向性タイプごとの恋愛プロフィールの比較

	不特定 - 非自己保存型（*N*=81）	特定 - 非自己保存型（*N*=54）	不特定 - 自己保存型（*N*=49）	特定 - 自己保存型（*N*=90）	全体（*N*=274）
平均年齢	19.85 歳	19.81 歳	20.35 歳	19.98 歳	19.97 歳
交際経験有の人数（％）	64 名（79.01）	48 名（88.89） 1 名無回答	39 名（79.59）	71 名（78.89）	222 名（81.02） 1 名無回答
これまでの交際人数の平均	2.91 人	2.63 人	2.68 人	2.24 人	2.59 人
最長の交際期間の平均	19.23 ヶ月	16.07 ヶ月	15.49 ヶ月	18.16 ヶ月	17.55 ヶ月

Ⅳ　考察

本研究では、「恋愛関係志向性尺度」を作成することによって、筆者の仮定した「恋愛関係志向性の２次元評価４分類モデル」をまずは提示し、モデルの実現可能性を検証することを目的とした。その結果、このモデルを用いることにより、多様化した恋愛関係のあり方を概観する際の指標を作成し得る可能性が示唆された。

２軸の特性について、これまでの研究においては、「排他性」「拘束感」、つまり「特定性」といった特徴が恋愛関係を理解する上での全般的な指標として前提とされてきた。しかし、同時に「不特定性」という特徴を前提として捉えることもまた、現代の多様な恋愛関係のあり方を理解する上で有用な視点であることが示唆された。また、本研究において提唱した、「不特定性 - 特定性」と「非自己保存性 - 自己保存性」の２軸は、「恋愛関係志向性の２次元評価４分類モデル」で提示したように、恋愛関係志向性において独立した性質をもつという結果が得られた。たとえば、非自己保存性を帯びた恋愛関係、すなわち交際相手の価値観やライフスタイルに比較的影響を受ける恋愛関係に志向性を持っている者のなかには、「不特定 - 非自己保存型」と「特定 - 非自己保存型」が混在しているということである。本研究における、「非自己保存性 - 自己保存性」とは関係性への態度であるといった定義をも鑑みると、「非自己保存性」とは、他者の価値観を積極的に取り入れる姿勢とも理解できる。つまり、「恋愛関係」に対する態度の志向性（「非自己保存性 - 自己保存性」）が多様化したからこそ、不特定あるいは特定の対象との（「恋愛行動」への志向性を孕んだ）恋愛関係を通して、さまざまなパターンや価値観、ライフスタイルを取り入れるといったことが可能となるとも解釈できる。宮下・斉藤（2002）が恋愛関係崩壊時の立ち直りにおける変容自体の意味を検討しているように、永続性の保障されない現代の恋愛のあり方（新矢、2003）が許される文化があるからこそ、恋愛関係における失敗や成功体験を含めた多様な体験が可能となると考えられる。たとえば、先述した「ポリアモリー（Polyamory）」といった新たな性愛スタイルについても、本研究においては「不特定性」かつ「自己保存性」を帯びた恋愛関係の志向性とも理解できる。ただし、このような志向性を持っていたとしても、実際の行動パターンと一致するか否かは現段階では明白とはならない。このことは、本研究において、不特定性得点と非自己保存性得点の高低によって、交際経験の有無、実際の交際人数や交際期間は影響を受けるとはいえないといった結果とも共通する。本研究では、あくまでもモデルの実現可能性を目的としたため、「恋愛プロフィール」については多く言及しなかった。しかし、多様な恋愛関係を網羅するためには、「恋愛関係志向性の２次元評価４分類モデル」のみでは不十分であることも示唆されたとも考えられる。これまでの恋愛研究は、恋愛に対する態度を測るものと、恋愛行動を測るものとに大別されてきた経緯があるにもかかわらず、本研究においては、あえて「恋愛関係志向性」といった概念を用い、恋愛関係のあり方を包括的に捉えようとした。おそらく、個人の特徴を捉える上では、志向性よりも実際の行動のパターンを捉えることの方が有用な手段であるとも考えられる。同時に、そもそも志向性という概念の特性が、実際の行動パターンより変容しやすいものであることも推察される。つまり、時代背景や、恋愛の様相が多様化している現代においては、あくまでも恋愛関係そのものではなく、社会に許容される恋愛関係の志向性の幅が多様化しやすくなったとも考えられる。ただし、志向性が変容しやすい

ものであるならば、それは個人の意志や方向性を憶測する指標ともなり得る。つまり、リスクサインとしての活用も可能となり得ることも示唆される。変わりにくい実際の行動パターンのみを捉えるより、それらを統合して個人を理解する有意味性も存在するはずである。よって、これらを踏まえた上で、個人の志向性と、実際の行動パターンをあえて区別し、それらの関連性や流動性について言及することによって、より現代の複雑化した恋愛の様相について言及することが期待される。そのように考えると、実際の行動パターンに直結しやすいと考えられる「不特定性 - 特定性」といった特性がもつ意味合いや、その行動パターンが派生する要因について言及することは、個人を理解する上で重要な視点であると理解される。よって、「恋愛関係志向性尺度」の内容の再構成や妥当性の吟味についても、今後必要と考えられる。このことが明確となったこと自体が、本研究の成果とも言える。

また、本研究における調査対象者は大学生であり、基本的には自己保存性が保たれるといった特徴をすでに持ち合わせているであろうことは考慮すべきである。つまり、ほどよい「不特定性」あるいは「非自己保存性」の程度自体が、個人によって異なる可能性も留意すべきである。しかし、この際にも「恋愛関係志向性」が変容するものであると仮定するならば、2 軸の特性が個人の中で極端となった場合には、先述したように、さまざまなリスクサインとしての活用も可能と考えられる。たとえば、自分の価値観やライフスタイルの変容を頑なに拒む姿勢、過度な「自己保存性」は、反恋愛的な性質を持つこととなる。あるいは、恋愛によって自分の価値観やライフスタイルまでが過度に影響を受ける上に、関係（対象）が安定しないと、完全な「非自己保存性」つまり、自己放棄あるいは自己破壊的な危うい恋愛行動となり得る。それらを実証するには、対人発達的な視点を用いて、2 軸の特性を維持しながら変容していくものであるものとして捉え、安定した対人的性的パターンが確立するまでに、どのような恋愛関係パターンの展開を辿るのかについての縦断的研究も有用であると考えられる。つまり、いかに「非自己保存性」と「不特定性」を体験して、安定した恋愛関係パターンを確立していくのかといった過程も重要とも考えられる。加えて、今回は女性に限定して言及したが、男性は女性よりも、不特定の相手との関係を持つという、従来からのステレオタイプ（Money, 1987）との関連も踏まえ、男女双方を対象とした言及も不可欠であると考えられる。

Ⅴ　引用文献

Chapman, A.H. & Chapman M.C.M.S.（1980）. Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness.（A.H. チャップマン, M.C.M.S. チャップマン（1994）山中康裕監修　武野俊弥・皆藤章（訳）サリヴァン入門―その人格発達理論と疾病論―岩崎学術出版社）

Cindy Hazan & Phillip Shaver（1987）. Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-524.

Davis, K. E.（1985）. Near and Dear; Friendship and love compared. Psychology Today, 19, 22-30.

E.H.Erikson（1959）. Identity and the Life Cycle.（エリク･H･エリクソン（2011）西平直･中島由恵（訳）アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）pp102-105.142-144.

深海菊絵（2015）　ポリアモニー　複数の愛を生きる　平凡社新書

Fromm, E.（1956）The Art of loving.（フロム, E.（1991）鈴木晶（訳）愛するということ　紀伊國屋書店）

藤原武弘・黒川正流・秋月左都士（1983）日本版 Love-Liking 尺度の検討　広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 7, 265-273.

Gross, L.（1944）. A belief pattern scale for measuring attitudes toward romanticism. American Sociological Review, 9, 463-472.
林もも子（2010）. 思春期とアタッチメント　みすず書房　pp3-48.
John Money（1980）. LOVE AND LOVE SICKNESS. The Science of Sex, Gender Difference, and Pair-bonding. The Johns Hopkins University Press.（ジョン・マネー. 朝山春江・朝山耿吉（訳）（1987）. ラブ・アンド・ラブシックネス 愛と性の病理学　人文書房　pp112-124.）
金政祐司（2002）. 恋愛イメージ尺度の作成とその検証―親密な異性関係，成人の愛着スタイルとの関連から―　対人社会心理学研究，2，93-101.
金政祐司（2006）. 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について　社会心理学研究，第 22 巻第 2 号，139-154.
金政祐司・大坊郁夫（2003）. 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響　社会心理学研究，19，59-76.
髙坂康雅（2009）. 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と，交際期間，関係認知との関連　パーソナリティ研究，17，144-156.
髙坂康雅（2010）. 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連　発達心理学研究，第 21 巻，第 2 号，182-191.
髙坂康雅（2011）. 青年期における恋愛様相モデルの構築　和光大学現代人間学部紀要，第 4 号，79-89.
Lee, J.A.（1973）. The Colors of Love. Ontario:New Press.
牧野幸志（2012）. 青年期における恋愛と性行動に関する研究（3）―大学生の浮気経験と浮気行動―　経営情報研究 第 19 巻第 2 号，19-36.
松井豊（1990）. 青年の恋愛行動の構造　心理学評論，33，355-370.
松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美（1990）. 青年の恋愛に関する測定尺度の構成　東京都立立川短期大学紀要，23，13-23.
宮下敏恵・斉藤淳子（2002）. 青年期 における恋愛関係崩壊後の心理的反応とその有効性について　上越教育大学研究紀要, 第 22 巻, 第 1 号, 231-245.
小塩真司（2000）. 青年の自己愛傾向と異性関係―異性に対する態度，恋愛関係，恋愛経験に着目して―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学 47, 103-116.
新矢昌昭（2003）. アイデンティティにおける恋愛：アイデンティティから自己物語としての恋愛へ　華頂短期大学研究紀要, 第 48 号, 56-73.
Sternberg, R. J.（1986）. A triangular theory of love. Psychological Review, 93, 119-135.
大野久（1993）. アイデンティティのための恋愛に関する質的データからの接近　日本教育心理学会総会発表論文集（35），208.
Robert J. Sternbarg & Karin Weis（2006）. The New Psychology of Love. Yale University
Rubin, Z.（1970）Measurement of romantic love. Journal of Personality and Social Psychology, 16, 265-273.

Ⅵ　付記・謝辞

本論文は、平成 24 年度京都文教大学大学院臨床心理学研究科に提出した修士論文のデータの一部を、新たに分析し、加筆・修正したものである。本論文の執筆にあたり、ご指導いただきました京都文教大学の川畑直人教授、調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。

Abstract

Development of “Orientation in Romantic Relationship Questionnaire（ORRQ）” among Adolescent Females

Risa TANAKA

The purpose of this paper is to investigate the forms of romantic love that have been diversified in modern societies. In modern times, the forms of romantic love separated from traditional institutions and reproduction has become established. However, the present authors were unable to find any previously published research that focused on capturing the various forms of romantic love comprehensively. One of the reasons is the ambiguity of the concept of “romantic relationship”. In this study, the forms of romantic love was measured by two dimensions, one of which is called nonmonogamy-monogamy axis, and another of which is called abandonment-maintenance axis of personal style. The perspective with these two dimensions is called “orientation in romantic relationship”. The former axis represents an aspect of one’s orientation regarding romantic behavior, i.e. whether one strictly pursue a specific person as a love object or have multiple relationships simultaneously or successively. The latter axis represent an aspect of one’s orientation regarding romantic relationship, i.e., whether one try to maintain one’s personal life style as much as possible or abandon it easily adjusting to one’s love object. These two dimensions were used to classify 4 types of romantic relationship, i.e. 1）nonmonogamy-abandonment type, 2）nonmonogamy-maintenance type, 3）monogamy-abandonment type, and 4）monogamy-maintenance type. In order to measure two dimensions, “orientation in romantic relationship questionnaire（IRRQ）” was invented. IRRQ was constructed with two scales; 7 items of nonmonogamy scale and 9 items of abandonment scale, and administered to 274 subjects, female undergraduates. The non-hierarchical cluster analysis indicated that “orientation in romantic relationship” was categorized into four types; 1）nonmonogamy-abandonment type, 2）nonmonogamy-maintenance type, 3）monogamy-abandonment type and 4）monogamy-maintenance type, by the degree of nonmonogamy score and abandonment score. These results suggested that two dimensional model is useful for evaluating each person’s orientation in romantic relationship.

Key words : romantic relationship, adolescent females, orientation